

特集

2015年度 大学入試を振り返る

本誌4・5月号では、2015年度入試の速報として大学入試センター試験の概況と国公立大、主要私大の出願状況についてお伝えした。

この度、全国の高等学校の先生方にご協力いただき約189万件の貴重な入試結果調査（可否）データを集めることができた。また、各大学からも最終的な入試結果資料を送付いただいたので、本誌ではこれらの集計結果を踏まえ、2015年度入試を総括する。なお、個々の大学の入試結果については34ページ以降に掲載しているので是非ご利用いただきたい。

Part 1 国公立大学

センター試験 新課程1年目 現役生が増加する一方既卒生は減少

この春の18歳人口は昨年より19,139人増の1,199,977人（前年比102%）だった。センター試験の志願者数も、現役生は12,074人増の455,392人（前年比103%）と18歳人口に比例して増加したが、既卒生が13,186人減の98,728人（前年比88%）となり、全体では1,540人減の559,132人（前年比100%）と前年並みにとどまった。

【図表1】はこの度判明した合格者数を含む国公立大の入試結果概況だ。国公立大の志願者数は前期日程で258,865人（前年比98%）と4,038人減少した。今春入試から数学と理科が新課程を迎え、センター試験の出題科目にも変更があった。各科目の平均点は、新課程科目と旧課程科目の間に10点前後の差があったが、問題の難易度というよりは学力差が反映された結果と言えるだろう。河合塾が行った「センター・リサーチ」での7科目型受験者の成績分布を見ると、文系では全体が上昇しているが、理系では得点率85%以上の高得点者層が増

加し、65～85%の層が減っている。国公立大の出願動向も、全体として極端に難関大を敬遠する動きは見られない一方で、国公立大の出願自体を躊躇する様子が窺えた。文系で理科①2科目、理系で理科②2科目の受験が必要な大学が多いことから、科目負担の大きさも敬遠される要因になった。

後期日程の志願者は5,390人減の189,386人（前年比97%）、中期日程は454人減の26,278人（前年比98%）といずれの日程でも減少した。近年募集停止が相次いでいた後期日程では今春は前年並みの募集人員が確保されていた。だが、前期志願者に対する後期志願者数の割合（後期の志願率）は73.2%と前年より0.9%低下した。一方で合格者数は前年並みだったため、倍率は前期日程2.87倍→2.80倍、中期日程5.94倍→5.53倍、後期日程7.80倍→7.52倍と全体的に低下した。今春入試では、国公立大の門戸はやや広くなったと言える。

【図表1】国公立大入試結果 全体概況

区分	募集人員		志願者数 (A)			合格者数 (B)			倍率 (A/B)		
	14	15	14	15	15/14	14	15	15/14	14	15	
国立	前期	65,070	65,151	201,628	198,849	99%	72,530	72,776	100%	2.8	2.7
	後期	15,929	15,789	149,596	146,128	98%	19,898	19,937	100%	7.5	7.3
	全体	80,999	80,940	351,224	344,977	98%	92,428	92,713	100%	3.8	3.7
公立	前期	14,885	14,987	61,275	60,016	98%	19,190	19,536	102%	3.2	3.1
	中期	1,933	1,958	26,732	26,278	98%	4,498	4,755	106%	5.9	5.5
	後期	3,555	3,714	45,180	43,258	96%	5,063	5,246	104%	8.9	8.2
	全体	20,373	20,659	133,187	129,552	97%	28,751	29,537	103%	4.6	4.4
国公立	前期	79,955	80,138	262,903	258,865	98%	91,720	92,312	101%	2.9	2.8
	中期	1,933	1,958	26,732	26,278	98%	4,498	4,755	106%	5.9	5.5
	後期	19,484	19,503	194,776	189,386	97%	24,961	25,183	101%	7.8	7.5
	全体	101,372	101,599	484,411	474,529	98%	121,179	122,250	101%	4.0	3.9

※ 5月29日現在河合塾集計

【図表2】 国立難関10大学入試結果

大学名	前期										後期									
	募集人員		志願者数 (A)			合格者数 (B)			倍率 (A/B)		募集人員		志願者数 (A)			合格者数 (B)			倍率 (A/B)	
	14	15	14	15	15/14	14	15	15/14	14	15	14	15	15/14	14	15	15/14	14	15		
北海道	1,939	1,939	5,815	5,705	98%	2,083	2,092	100%	2.8	2.7	483	491	4,324	4,129	95%	536	551	103%	8.1	7.5
東北	1,865	1,865	5,053	4,908	97%	2,023	1,999	99%	2.5	2.5	93	93	1,339	1,480	111%	109	125	115%	12.3	11.8
東京	2,963	2,963	9,415	9,444	100%	3,009	3,008	100%	3.1	3.1	100	100	3,047	2,940	96%	100	100	100%	30.5	29.4
東京工業	923	903	3,857	3,803	99%	961	941	98%	4.0	4.0	20	20	549	483	88%	25	24	96%	22.0	20.1
一橋	840	840	2,697	2,748	102%	871	869	100%	3.1	3.2	80	80	1,266	1,373	108%	85	90	106%	14.9	15.3
名古屋	1,728	1,728	4,728	4,914	104%	1,839	1,856	101%	2.6	2.6	5	5	41	65	159%	6	6	100%	6.8	10.8
京都	2,846	2,846	8,355	8,041	96%	2,935	2,907	99%	2.8	2.8										
大阪	2,834	2,834	7,045	7,263	103%	3,007	2,996	100%	2.3	2.4	346	346	3,225	3,064	95%	389	397	102%	8.3	7.7
神戸	1,874	1,874	5,887	5,587	95%	2,012	2,021	100%	2.9	2.8	443	443	4,200	4,399	105%	542	544	100%	7.7	8.1
九州	2,045	2,042	5,235	4,938	94%	2,202	2,195	100%	2.4	2.2	325	318	2,750	2,714	99%	373	380	102%	7.4	7.1
全体	19,857	19,834	58,087	57,351	99%	20,942	20,884	100%	2.8	2.7	1,895	1,896	20,741	20,647	100%	2,165	2,217	102%	9.6	9.3

※ 5月29日現在河合塾集計

難関大志願状況
センター試験 高得点者層は強気の出願

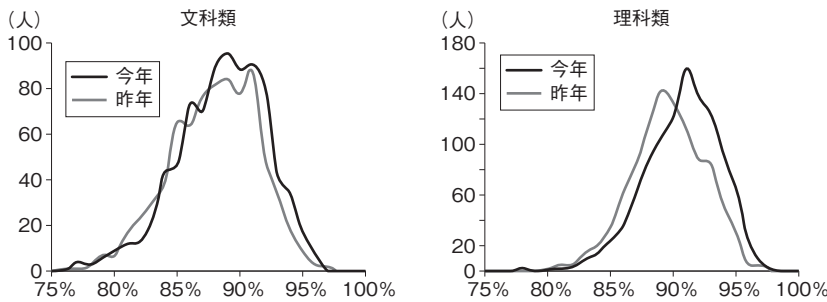
【図表2】は難関10大学の入試結果をまとめたものである。難関10大学を合わせた志願者は前年比99%、その他の大学の集計では同98%であり、難関大を敬遠する動きは見られない。各大学の志願状況については本誌4・5月号で詳細に分析しているの、ここでは入試結果調査データを元に今春動きがあった大学を紹介する。

東京大は昨年模試では志望者が減少していたが、最終的な前期日程の志願者は前年比100%に落ち着いた。【図表3】は東京大合格者のセンター試験得点率を文科類と理科類に分け、昨今で比較したものだ。文科類も理科類も得点率90%以上の層が増加しグラフが右へシフトしているのがわかる。センター試験でしっかりと得点できた層が志望を変えず、そのまま東京大へ出願したようだ。文科類の志願者は文科一類が前年比107%、文科二類が同102%と増加した。センター試験

直後の「センター・リサーチ」と実際に出願した「入試結果調査」での志望変更の実態を昨今で比較すると、文科一類にそのまま出願した割合は47.5%→50.3%、文科二類は58.0%→62.6%と上昇している。文科三類では58.2%→54.9%と下がる一方、よりボーダーの高い文科一類・二類へ変更した割合が増えており、強気の出願が窺える。だが、合格者の模試段階の2次学力分布を見ると昨年より低い層が多い。2次試験のボーダーランクは、文科二類と文科三類で1ランクダウンし、0ランク（偏差値67.5）となった。その他、東京大の入試結果トピックスとして現役占有率の上昇が注目される。大学公表の合格者数を高校卒業年別の内訳で見ると、今春入試の現役占有率は67.1%と例年になく高い。特に文科類は昨年より5%高くなった。

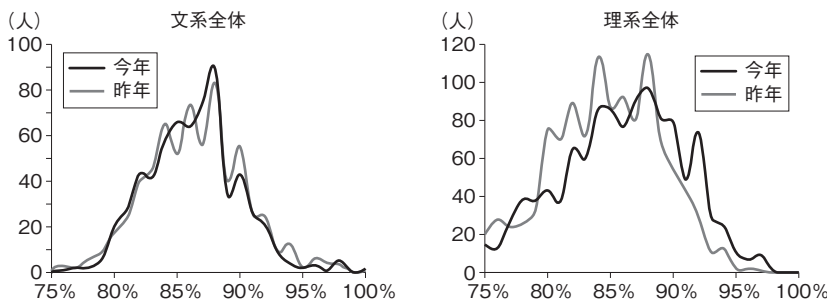
京都大は今春、文、法、総合人間（文系）学部でセンター試験と2次試験の地歴の科目選択条件を撤廃、医学科で理科の必須科目数を3科目から2科目にする入試変更があり、模試段階では志望者を大幅に増やしていた。ところが蓋をあけてみると、前期日程は大学全体で前年比96%と減少した。内訳

【図表3】 東京大（前期）合格者のセンター得点分布



※河合塾入試結果調査データより

【図表4】 京都大（前期）合格者のセンター得点分布



※文系は文・教育・法・経済・総合人間学部、理系は理・工・農・医・薬学部で集計
※河合塾入試結果調査データより

は文系学部と理系学部で状況が違い、文系学部全体は前年比91%と1割近く減少したのに対し、理系学部全体は同99%だった。合格者のセンター試験得点率は、理系は得点率90%以上の層が増え右に動いているが、文系は若干左へシフトしている【図表4】。ボーダーランクも法学部と経済学部は1ランクダウンし1ランク（偏差値65.0）になった。

京都大では近年、他地区志願者の割合が増加し続けている。大学公表資料によると、近畿地区以外からの志願者比率は今年度ついに5割を超えることになった。特に関東地方からの流入が多く、この3年間で200人近く増えている。

【図表5】 国公立大（前期） 学部系統別入試結果

系統	志願者数 (A)			合格者数 (B)			倍率 (A/B)	
	14	15	15/14	14	15	15/14	14	15
文・人文	24,967	24,528	98%	9,047	9,270	102%	2.8	2.6
社会・国際	9,056	9,105	101%	3,347	3,356	100%	2.7	2.7
法・政治	11,721	12,496	107%	4,898	5,057	103%	2.4	2.5
経済・経営・商	25,957	24,799	96%	10,099	9,962	99%	2.6	2.5
教育－教員養成課程	19,483	19,697	101%	7,974	8,152	102%	2.4	2.4
教育－総合科学課程	6,673	6,249	94%	2,582	2,323	90%	2.6	2.7
理	16,047	15,578	97%	5,817	5,864	101%	2.8	2.7
工	70,645	69,514	98%	25,441	25,416	100%	2.8	2.7
農	17,722	17,142	97%	5,954	5,997	101%	3.0	2.9
医・歯・薬・保健	42,726	40,963	96%	11,247	11,315	101%	3.8	3.6
医	19,919	18,999	95%	3,704	3,762	102%	5.4	5.1
歯	2,005	2,022	101%	482	481	100%	4.2	4.2
薬	3,324	2,886	87%	844	852	101%	3.9	3.4
看護	11,577	11,557	100%	4,243	4,249	100%	2.7	2.7
医療技術・他	5,901	5,499	93%	1,974	1,971	100%	3.0	2.8
生活科学	2,592	2,558	99%	806	837	104%	3.2	3.1
芸術・スポーツ科学	7,551	7,790	103%	1,663	1,787	107%	4.5	4.4
総合・環境・情報・人間	7,763	8,446	109%	2,861	2,985	104%	2.7	2.8
全体	262,903	258,865	98%	91,736	92,321	101%	2.9	2.8

※ 5月29日現在河合塾集計、学部系統の分類は河合塾による

「文低理高」の終焉
医療系の人気に陰り

【図表5】は前期日程の学部系統別入試結果だ。理系系統が軒並み志願者を減らす一方、文系は「社会・国際」「法・政治」「教員養成課程」で志願者が増加した。景気の回復基調により就職状況の改善が話題に上がるようになったことが、系統の人気に影響したようだ。また、前述した新課程に伴うセンター試験理科の再編も関係している。【図表6】は理科の受験パターンの割合を文系と理系に分けて示したものである。文系生は理科①2科目（パターンA）、理系生は理科②2科目（パターンD）の割合が圧倒的に多い。理科②には旧課程

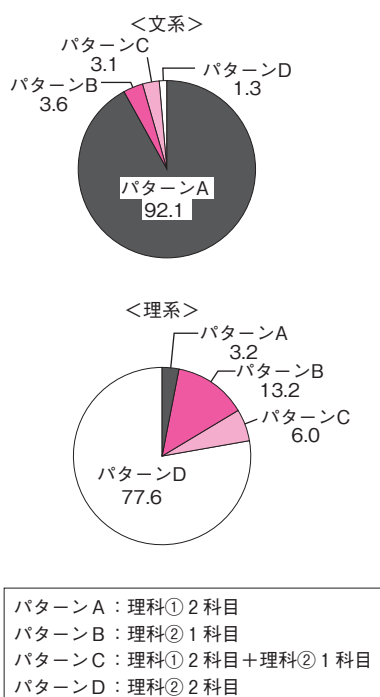
という理科Ⅱにあたる内容も含まれており、センター試験の段階でこの範囲を2科目カバーしなくてはならないのは、受験生にとって大きな負担となる。そのため、特に理科の比重が大きい理系系統は敬遠される傾向にあった。この傾向は今年の5月に行った第1回全統マーク模試でも続いており、ここ数年続いていた「文低理高」の流れは今春入試でひと段落ついたと言えるだろう。

各系統を個別に見ていくと、まず4年連続で志願者が減少していた「法・政治」学系が前年比107%と大幅に増加したのが

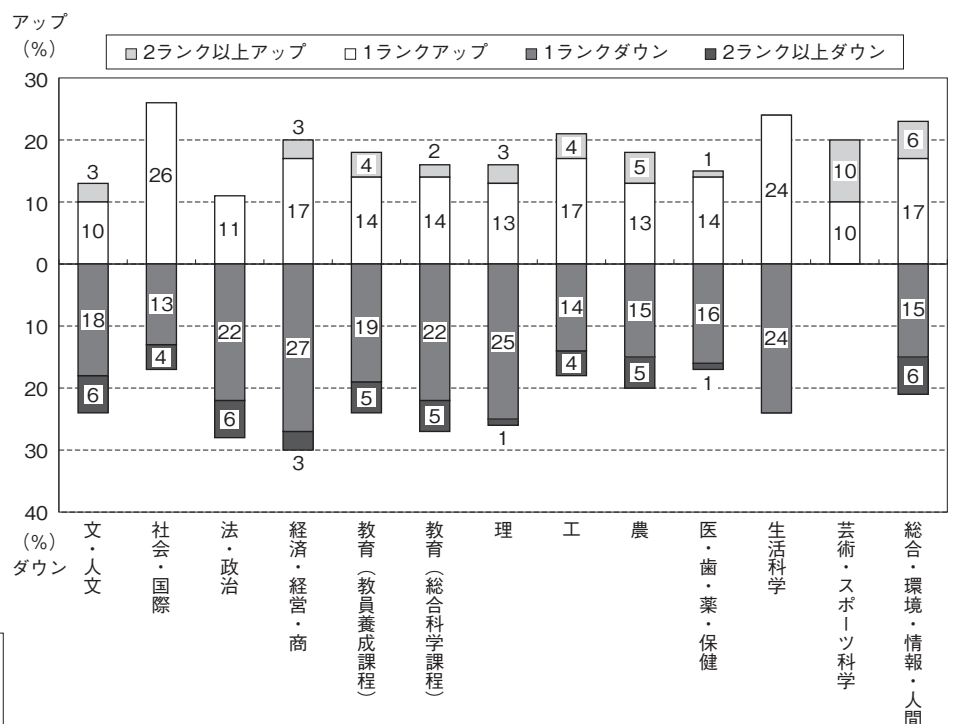
目につく。旧帝大を含む難関10大学の志願者は前年比100%程度だが、地方の拠点大学や公立大学で増加率が高い。この系統ではここ数年の志願者減で狙い目になっていた大学も多く、そうした大学を中心に志願者の増加が見られた。ただし、志願者の増加が系統の難化には直結していない。【図表7】は2015年度の合否のデータから設定した、実態ランクのアップ・ダウン率を系統別に表したものである（系統により募集区分が大きく異なるため、各系統の募集区分数におけるアップ・ダウン件数の占有率を表示）。法・政治学系は、ボーダーランクに関してはダウン件数が多くなっている。

【医・歯・薬・保健】は就職に繋がる資格を取得できることから近年堅調な人気を示していたが、今春入試では「歯」学系を除いて志願者が減少した。「医」学系は今年度も一部の

【図表6】 センター試験理科 受験パターン



【図表7】 国公立大前期2次ランク 系統別アップ・ダウン率



大学で増員があり、募集人員はわずかに増加したが、合格者数は99%に絞られた。しかし志願者数がそれを上回る減少率となったため、倍率は5.38→5.05倍へとダウンした。だが、医学科前期合格者のセンター試験得点率を見ると、90%以上の層が増加し、全体が上昇している。2次試験のボーダーランクもランクアップの大学がダウンの大学を上回っており、倍率が下がっても易化したとは言えない。「薬」学系では薬剤師養成課程の減少が響き、前年比87%と大きく減少した。薬剤師養成課程は2006年の6年制化により一時志願者が減少していたが、ここ数年は資格系の人気を受けて増加に転じ、昨年には2006年以前の水準に戻っていた。今春入試での人気急落は、昨年の国家試験合格率が60.8%と低い水準になったことも影響しているだろう。中期日程で選抜を行うため、例年他系統志願者からの流入も多い東海の公立3大学も大幅に志願者を減らしており、今春の薬学部の不人気を裏付けている。

2016年度入試のトピックス

最後に本誌発行時点で判明している来年度入試の主な情報をまとめておく。

来春入試も学部・学科の新設・改組が多く予定されている。目立つのは教育学部に関する改組だ。弘前大、岩手大、宇都宮大、千葉大、福井大、静岡大、信州大、和歌山大、愛媛大、福岡教育大、佐賀大、大分大、宮崎大が教育学部の総合科学課程、いわゆる“ゼロ免”課程を廃止し、教員養成課程に一本化する。また、総合科学課程の廃止と連動して、元からあった学科・専攻を地域創生系や国際系の学部・学科へ改組するところもある。岩手大（人文社会科学－地域政策）、宇都宮大（地域デザイン科学）、千葉大（国際教養）、福井大（国際地域）、愛媛大（社会共創）、佐賀大（芸術地域デザイン）、宮崎大（地域資源創成）などがそれぞれにあたる。これら教育学部に関する改組は、文科省が国立大学改革プランの一貫として、具体的にゼロ免課程の廃止などに触れながら組織編成の見直しを提言したことに応える形となっている。この改革プランでは、他にも国立大を地域活性化の中核の拠点にすることや、グローバル人材の育成・大学自体の国際化対応など多くの提言がなされており、前述の学部・学科新設にも繋がっている。既に今春も山口大（国際総合科学）、高知大（地域協働）などが設置された。高知大（地域協働－前）は倍率4.86倍となった一方、山口大（国際総合科学－前）は倍率1.28倍と低倍率入試となった。こうした新学部がどれほど人気を集めるのかは未知数な部分が多い。それぞれの大学がどこまで独自のカリキュラムや学生支援策を打ち出し、それを受験生にいかアピールできるかによって人気も左右されそうだ。

その他に工学部の改組も目立つ。東京工業大では現在の3学部23学科を大学院組織と同時に6学院に改組し、専門分野間の横断的な学習を可能にするとともに修士・博士課程を見通した一貫教育をめざす。入口である学部入試に関しては、今までと同じく学類で募集を行う予定だ。電気通信大（情報理工）は現在の4学科を3類に再編し、学生が入学後、段階的に専門分野を選択できるようにする。また、学部・修士が一貫した教育を行えるよう大学院の改組も行う。同じく名古屋

工業大（工）も学部、大学院ともに再編成を行い、7学科8専攻を5学科5専攻に改組して博士課程への接続性を強化する。学部・大学院6年一貫教育を行う創造工学教育課程の設置も予定されている。

文部科学省は大学改革と同時に高大接続に関する改革も進めており、本誌でも順次動向をお届けしている（→高大接続を追う p.9）。この政府主導の入学選抜改革に先んじて、独自の入試改革を行う大学が徐々に増え始めている。具体的にはここ数年間学力担保の観点から廃止が相次いでいた推薦・AO入試の復活・新規実施や、外部英語試験の活用などが散見される。特に来年度注目すべきは東京大で初めて実施される推薦入試と、京都大の特色入試だろう。東京大の推薦入試は一般選抜の科類別募集と違い学部別に選抜が行われ、全体で100名程度の募集人員が割かれている。センター試験は基礎学力を有しているかの判断に用いるとのことで、8割以上の得点が目安とされており、東京大の受験を考えている層であれば難しい条件ではない。ただし、語学力や学部に関連する学問分野において特筆すべき推薦事由が求められるため、気軽に受験機会を増やせるレベルのものではないだろう。なお、この影響で一般選抜では理科三類の募集人員が100名→97名に縮小され、後期日程の募集が廃止される。推薦入試で合格者が出なかった学部は、前期日程に定員をまわすことになる。京都大の特色入試も全学部実施予定で、募集人員は全体で100名程度とされている。学力、論文、面接試験などで基礎学力や学部教育に必要な能力を測るほか、調査書や志願者が作成する「学びの設計書」など、提出書類も重視すると公表されている。試験の実施方式は「推薦」「学力型AO」「後期日程」の3つで、このうち法学部の募集人員が後期日程に割り当てられており、10年ぶりに後期日程が復活することになる。1次選考と2次選考に分かれ、1次は書類審査とセンター試験7科目文型、2次は1次合格者に対し、センター試験の成績と小論文で選抜を行う。第1回全統マーク模試では募集人員20名に対して61名の志望者で、ボーダー得点率は90%となった。実際に出願するとなると高校時代の活動歴や事前の書類準備が求められるため、他大学併願者からの流入はあまり考えられないだろう。

このほかにも、入試科目の変更、学部・学科の新設・再編や募集区分の変更などを予定している大学がある。本誌24ページ以降に一部をまとめているほか、河合塾の入試情報サイトKei-Netでも最新の情報を掲載しているので、是非ご活用いただきたい。

Part 2 私立大学

ここからは私立大の入試状況を見ていく。本誌4・5月号では、全国主要198大学の一般入試一期の志願状況を速報としてお伝えした。今号では、志願者・受験者・合格者数の集計が完了した全国533大学の入試結果をもとにレポートする。

センター方式は志願者減 合格者数は一般・センター方式ともに増加

今春行われた2015年度の私立大一般入試全体の志願者数(延べ数:以降全て同じ)は、3,060,864人(前年比101%)で前年を21,001人上回った【図表8】。国公立大が志願者減少となったのとは対照的な動きとなった。Part1で述べた通り、新課程への移行に伴うセンター試験変更の影響もあり、国公立大が敬遠された一方、科目負担が軽い私立大へシフトした様子が窺える。河合塾の入試結果調査データにおいても、国公立大専願者や国公立大・私立大併願者が前年並みもしくは減少しているのに対し、私立大専願者数は増加している。

入試方式別の内訳では、一般方式が2,077,289人(前年比102%)、センター方式が983,575人(同98%)となった。私立大受験においてもセンター方式を避ける動きが見られた。

一方、合格者数については私立大全体で前年比104%、人数にして33,763人の増加となった。一般・センターの両方式とも増加しており、とくにセンター方式では志願者数が減少し

たにもかかわらず、合格者数が増えたため、倍率(志願者/合格者:以降倍率は全て同じ)は2.85倍→2.70倍とダウンした。ボーダー得点率がダウンした募集区分は全体の約3割となっており、昨春よりも受かりやすいと感じた大学が多かったのではないだろうか。

次に、地区別の動向について見ていこう。【図表9】は今春の私立大の入試結果を地区別に分けたものである。首都圏や近畿地区では前年並みとなったが、その他では地区により状況が異なる。志願者減少率が高かった北海道地区は昨春改組により志願者が7倍に増えた北海道科学大がその反動から8,412人→6,434人(前年比76%)と志願者を減らした影響が大きい。九州地区は福岡大と西南学院大がいずれも約5%の志願者減となったのをはじめ、医療系の単科大なども志願者が減少しており、地区全体で前年比93%となった。前年比105%と志願者を増やした東海地区は、南山大や中京大といった地区の拠点大をはじめ、一般的に志願者数が増加した大学が目立つ。地区内の受験生の動向を入試結果調査データで見ると、他地区の大学に出願した数が前年比100%であるのに対し、地元の大学に出願した数は前年比106%と増加率が高くなっており、地元志向が一層強まっている様子が感じられた。

【図表8】私立大入試結果(一般・センター/一期・二期別)

	志願者数(A)					合格者数(B)					倍率(A/B)			
	13	14	15	14/13	15/14	13	14	15	14/13	15/14	13	14	15	
全体	2,974,095	3,039,863	3,060,864	102%	101%	854,418	910,408	944,171	107%	104%	3.5	3.3	3.2	
方式別	一般	2,019,967	2,039,456	2,077,289	101%	102%	541,691	558,812	579,871	103%	104%	3.7	3.6	3.6
	センター	954,128	1,000,407	983,575	105%	98%	312,727	351,596	364,300	112%	104%	3.1	2.8	2.7
期別	一期	2,760,521	2,828,605	2,848,327	102%	101%	795,950	845,351	879,163	106%	104%	3.5	3.3	3.2
	二期	213,574	211,258	212,537	99%	101%	58,468	65,057	65,008	111%	100%	3.7	3.2	3.3

※5月29日現在 河合塾集計(533大学判明分)

※2013~15年度の志願者数・合格者数公表大学を集計(合格者数の未判明やいずれかの年度データが非公表の学部・学科等については集計対象から除く)

※集計には公立大学法人へ移行した次の大学の数値を含む(2013・2014年度:長岡造形大)

※大学公表値には一部推薦入試等の数字が含まれている場合がある【図表9】以降も同条件で作成

【図表9】私立大入試結果(地区別)

地区	志願者数(A)					合格者数(B)					倍率(A/B)		
	13	14	15	14/13	15/14	13	14	15	14/13	15/14	13	14	15
北海道	31,367	37,893	35,235	121%	93%	16,002	19,524	18,181	122%	93%	2.0	1.9	1.9
東北	31,517	33,513	32,252	106%	96%	14,487	15,122	15,552	104%	103%	2.2	2.2	2.1
関東・甲信越(首都圏除く)	35,724	37,254	35,808	104%	96%	14,304	15,072	16,012	105%	106%	2.5	2.5	2.2
首都圏	1,758,184	1,766,398	1,778,372	100%	101%	449,148	478,600	493,315	107%	103%	3.9	3.7	3.6
北陸	18,183	20,732	21,060	114%	102%	8,656	9,008	9,118	104%	101%	2.1	2.3	2.3
東海	244,233	261,177	275,229	107%	105%	90,489	99,170	103,030	110%	104%	2.7	2.6	2.7
近畿	672,981	702,140	707,798	104%	101%	183,403	195,449	208,011	107%	106%	3.7	3.6	3.4
中国	45,296	45,445	47,091	100%	104%	23,418	23,402	24,400	100%	104%	1.9	1.9	1.9
四国	11,940	10,624	11,470	89%	108%	6,281	5,769	6,169	92%	107%	1.9	1.8	1.9
九州	124,670	124,687	116,549	100%	93%	48,230	49,292	50,383	102%	102%	2.6	2.5	2.3
全体	2,974,095	3,039,863	3,060,864	102%	101%	854,418	910,408	944,171	107%	104%	3.5	3.3	3.2

【図表10】 私立大入試結果（主要大学グループ）

大学グループ	志願者数 (A)					合格者数 (B)					倍率 (A/B)			
	13	14	15	14/13	15/14	13	14	15	14/13	15/14	13	14	15	
533大学 計	2,974,095	3,039,863	3,060,864	102%	101%	854,418	910,408	944,171	107%	104%	3.5	3.3	3.2	
主な大学グループ	早慶上理	228,942	229,869	230,694	100%	100%	49,762	50,474	50,582	101%	100%	4.6	4.6	4.6
	MARCH	408,859	392,872	395,595	96%	101%	79,480	82,092	84,375	103%	103%	5.1	4.8	4.7
	日東駒専	229,818	226,268	240,818	98%	106%	63,055	65,616	73,582	104%	112%	3.6	3.4	3.3
	関関同立	266,249	267,233	261,478	100%	98%	73,188	78,241	80,531	107%	103%	3.6	3.4	3.2
	産近甲龍	186,009	201,171	209,024	108%	104%	39,569	42,567	47,970	108%	113%	4.7	4.7	4.4

※早慶上理：早稲田・慶應義塾・上智・東京理科 MARCH：明治・青山学院・立教・中央・法政 日東駒専：日本・東洋・駒澤・専修
関関同立：関西・関西学院・同志社・立命館 産近甲龍：京都産業・近畿・甲南・龍谷

大学グループ別志願状況

続いて、大学グループ別の動向について見ていく【図表10】。

「早慶上理」は志願者・合格者とも前年並みであった。早稲田大は8年連続で志願者が減少した。一方、合格者数は増加しており、学部別に見ても文化構想、創造理工学部を除くすべての学部で増加した。教育学部では、志願者数が増加したものの、増加は成績下位層によるもので、ボーダーランクは3分の1の募集区分で1ランクダウンした。入試日程を前倒した慶應義塾大は前年比102%と7年ぶりの志願者増加となった。合格者数の絞り込みが行われたが、ボーダーランクの変動には至らなかった。TEAP利用型入試を導入した上智大は、志願者が1割近く増加した。既存の方式の志願者数は前年の8割程度にとどまったものの、外国語学部や総合人間科学部ではボーダーランクが1ランクアップした。

「MARCH」も前年比101%と堅調に志願者を集めた。青山学院大は新設の地球社会共生学部が2,908人の志願者を集めたほか、教育人間科学部や経済学部でも志願者が増加し、大学全体の志願者数は前年比107%となった。中央大は4年連続の志願者減となったが、一般・センター方式ともに合格者数が増加した。

「日東駒専」は前年比106%志願者数が増加したが、センター

方式で併願割引制度を導入した東洋大の影響が大きい。センター方式の志願者数は1.7倍に増加したが、合格者数は志願者の伸び率よりも抑えられており、4割の募集区分でボーダー得点率がアップした。

近畿圏では、「関関同立」が前年比98%と志願者を減らした。グループで唯一志願者増となったのは立命館大。特にびわこ・くさつキャンパスから大阪いばらきキャンパスへ移転した経営学部は前年比123%と大幅な増加となった。【図表11】は志願者の出身地と学力分布を比較したもの。大阪、兵庫、奈良の志願者が増え、近畿6府県の占有率が6割近くまで上昇している。また、学力分布も山が一回り大きくなり、右側にシフトしていることが分かる。学部個別日程ではいずれの学科のボーダーランクも1ランクアップした。

「産近甲龍」は前年比104%。大学別にみると龍谷大、近畿大で増加、京都産業大、甲南大で減少と明暗が分かれた。龍谷大は新設の国際学部と農学部で8千人を超える志願者を集めたことが影響しており、既存の学部での志願者数は前年並みとなっている。昨春に続き、志願者数日本一になった近畿大は合格者数も2年連続で大幅な増加となった。倍率はこの3年間で5.5倍→5.3倍→5.0倍とダウンしている。

文系の人気回復 理系は系統により明暗分かれる

【図表12】は系統別の入試結果を集計したものである。大筋は4・5月号でお伝えした内容と変化ないが、特徴的な系統について再度取り上げておく。

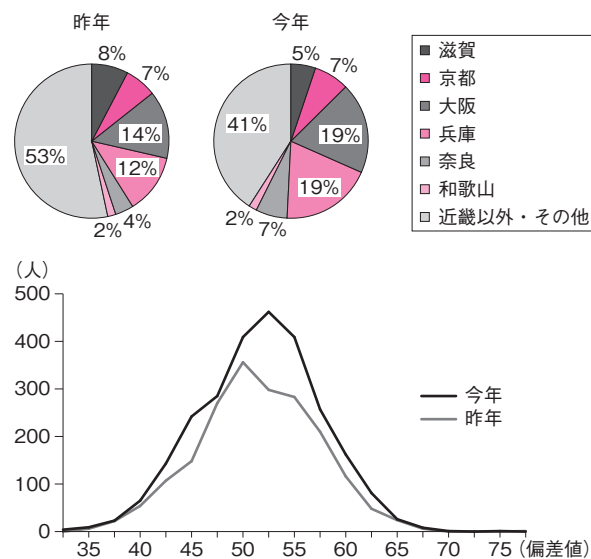
国公立大同様、私立大でもここ数年鮮明であった「文低理高」に変化が生じた。

文系では「社会・国際」学系の志願者数は前年並みとなったものの、「法・政治」「経済・経営・商」では志願者が増加しており、長らく不人気だった社会科学系に回復の兆しがみられる。

理系では系統により明暗が分かれた。「理」学系で前年比96%、「農」学系で同98%と志願者が減少した一方で、「工」学系は前年比104%と志願者が増加した。

医療系では、国公立大と同様、「薬」での志願者減少が目立つ。ここ数年新設が相次ぐ「看護」は前年比102%と志願者が増加。今春新設された日本福祉大、同志社女子大、神戸女子大では1千人以上志願者を集めたものの、既存の大学では減少している大学も散見され、志願者が分散している様子が窺える。

【図表11】 立命館大（経営）の志願状況



※いずれも河合塾入試結果調査データより作成

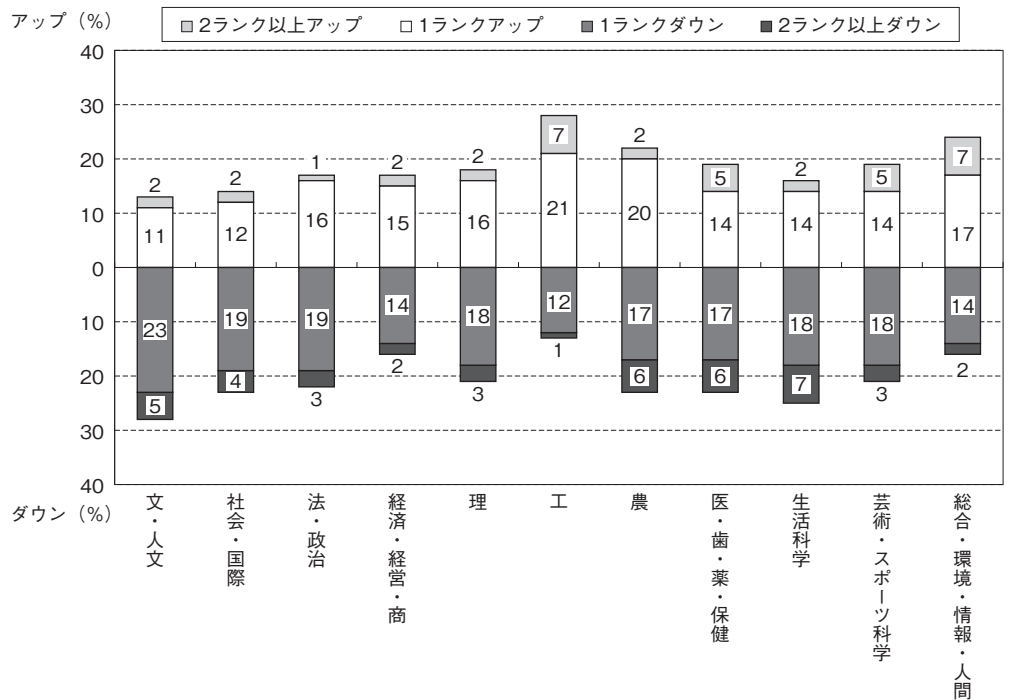
【図表12】 私立大入試結果（学部系統別）

系統	志願者数 (A)					合格者数 (B)					倍率 (A/B)		
	13	14	15	14/13	15/14	13	14	15	14/13	15/14	13	14	15
文・人文	612,338	607,936	604,820	99%	99%	184,886	196,291	205,966	106%	105%	3.3	3.1	2.9
社会・国際	257,426	256,819	257,625	100%	100%	76,494	80,960	84,359	106%	104%	3.4	3.2	3.1
法・政治	226,614	218,110	225,197	96%	103%	73,601	77,117	79,260	105%	103%	3.1	2.8	2.8
経済・経営・商	552,754	547,269	559,916	99%	102%	160,795	170,486	174,192	106%	102%	3.4	3.2	3.2
理	127,794	131,084	125,620	103%	96%	36,036	38,569	40,198	107%	104%	3.5	3.4	3.1
工	488,065	527,679	547,574	108%	104%	147,635	158,461	162,356	107%	102%	3.3	3.3	3.4
農	97,560	104,890	102,294	108%	98%	22,710	25,171	27,633	111%	110%	4.3	4.2	3.7
医・歯・薬・保健	324,566	359,293	354,301	111%	99%	65,071	71,104	76,160	109%	107%	5.0	5.1	4.7
医	91,701	104,140	104,569	114%	100%	5,106	5,334	5,542	104%	104%	18.0	19.5	18.9
歯	4,644	5,985	7,475	129%	125%	2,308	2,432	2,387	105%	98%	2.0	2.5	3.1
薬	89,848	104,330	99,109	116%	95%	22,596	23,065	23,903	102%	104%	4.0	4.5	4.1
看護	71,926	71,899	73,607	100%	102%	16,688	19,492	22,415	117%	115%	4.3	3.7	3.3
医療技術・他	66,447	72,939	69,541	110%	95%	18,373	20,781	21,913	113%	105%	3.6	3.5	3.2
生活科学	86,958	84,789	83,312	98%	98%	25,428	27,738	29,238	109%	105%	3.4	3.1	2.8
芸術・スポーツ科学	92,035	92,266	90,376	100%	98%	26,368	27,576	27,941	105%	101%	3.5	3.3	3.2
総合・環境・情報・人間	107,619	109,275	109,432	102%	100%	35,120	36,635	36,583	104%	100%	3.1	3.0	3.0
全体	2,973,729	3,039,410	3,060,467	102%	101%	854,144	910,108	943,886	107%	104%	3.5	3.3	3.2

※「全体」の数値が他の集計と一致しないのは、入試方式により大学計しか公表しない大学があるため

【図表13】は私立大一般方式について2015年度の合否データから設定したボーダーランクのアップ・ダウン率を系統別に表したものである（系統により募集区分数が大きく異なるため、各系統の募集区分数におけるアップ・ダウン件数の占有率を表示）。文系では「経済・経営・商」学系を除き、ランクアップよりもランクダウンした件数が多い。理系では、「工」学系のアップ件数がダウン件数を大きく上回った。ただし、アップ件数の多くは9ランク（偏差値45.0）以下の大学であり、4ランク（偏差値57.5）から8ランク（偏差値47.5）の大学ではむしろダウン件数の方が多い。

【図表13】 私立大一般方式ボーダーランク 系統別アップ・ダウン率



2016年度入試のトピックス

2016年度入試のトピックとして挙げられるのは、外部英語試験活用のさらなる拡大である。今春入試で一般入試や国際系・外国語系以外の学部にも導入されるなど急速な広がりを見せたが、来春入試も東京理科大（経営－ビジネスエクス）、法政大、立教大、関西学院大などで外部英語試験を活用した入試方式が新規に実施される予定である。

既に判明している新設学部・学科の顔ぶれを見ると国際系、医療系の設置が目立つ。グローバル化を意識した動きから近年注目される国際系では、学習院大（国際社会）、武蔵野大（グローバル）、愛知淑徳大（グローバル・コミュニケーション）、名城大（外国語）、近畿大（国際）などが予定されている。医

療系では、設置が相次ぐ看護系で来春も6校の設置予定（5月現在）が判明している。また、注目されるのが、東北医科薬科大（東北薬科大から名称変更予定）の医学部新設である。認可されれば1979年の琉球大以来、37年ぶりの医学部新設となる。5月に実施した第1回全統マーク模試では、高成績層を中心に383人の志望者を集めており、現時点ではボーダーランクは0ランク（偏差値67.5）を予想している。今後の受験生の志望動向に注目したい。

今回は本誌10月号にて、2016年度入試の変更点を交えつつ、最新の入試動向をお伝えする。